
IS -隊長補佐の憂鬱-

偽桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - 隊長補佐の憂鬱 -

【Nコード】

N5945Y

【作者名】

偽桜

【あらすじ】

「こんな壊れた僕でも、幸せに生きていけるのかな」

これは、少し壊れてしまったオリ主「御刻 礼衣」がIS世界に転生し、ドイツ軍でゆらゆら生きていくおはなし。

作者が初心者＆割と文才がないです。

第一話 プロローグ（前書き）

初投稿です。

テストなので若干短いです。

第一話 プロローグ

~~~~~

ガ…………ガ…………ガガ…………

それは心の削れる音？

ガ…………ガ…………ガ…………

それは心の最期の叫び。

ガ…………ガ…………ガ…………

誰かと自分の赤いナニカで染まった体は、もう少しも動かないけれど。

…ガ…

ナニダも流せないほど、僕の心は磨り減ってしまったけれど。

ガ

それでも、最期に、叫びたい。  
それが絶対聞き届けられないとしても。

…………イキタイ…………

~~~~~

さて、突然で申し訳ないとは思っけれど、僕「御刻 礼衣（みとき
れい）」は転生者だ。

…オーケイ、その「いい精神病院紹介してあげようか？」みたいな
目線にはもうなれているから、怒るなんてことはしない。

でも、実際記憶として頭のなかにあるんだから、仕方無いだろう？

前世で普通の高校生として生き、死ぬ直前学校内で殺し…………いや、
あの時の事はもう思い出したくない。

で、死後何か白髪の老人みたいなのが出てきて、テンプレの如くチ
ート能力を貰ってこの世界『IS>インフィニット・ストラトス<
の世界』に来たって訳。

因みに貰った能力は、サブリ無しで『ヴィークル』に乗れる能力と

全体的な身体能力強化。何か「役に立つ物なら何でもいい」とか言ったらこうなった。

…というか『ヴィーグルエンド』とか、妙にチヨイスが渋い。おかげで生活には苦労しないし。

ま、そういう訳で、今は中学一年生の夏休みである。
せっかくの夏休みなので、僕は株取引で手にいれた某航空会社の株主優待券（配当でもらった）でドイツへ海外旅行をしている訳だ。
一人で。

…こつちの世界での両親には気味悪がられて中学に入学すると同時に独り暮らしさせられたからなあ　まあいいけど。

さて、何で僕がこんな現実逃避みたいな自己紹介を誰かに語っているかと言つと。

「……………えーと」

「……………ふえ」

目の前で突然銀髪眼帯少女が泣き出したからである。
いや決して僕が泣かせた訳ではない。
簡単に流れを説明すると、

レストラン探しに路地裏に入る

目の前の少女が暴漢に襲われかけているのを目撃

ヴィーグルを使い暴漢排除

少女に話し掛ける

少女泣き出す　イマココ！

…訳解らん。

まあ、何か僕の言葉が何かのトリガーになったみたいだし、取り敢えず事情を聞こうとしてみる。

「あの、大丈夫？」

「……大丈夫では……ない……」

お、日本語通じた。

「……また……他の隊員に馬鹿にされる……」

『隊員』って事は、何かの組織にでも入っているのだろうか。見た感じ小柄だけど『ひみつきちっこ』とかする年齢ではないっぽいし。

しばらく事情を聴いてみた所、何とこの少女、原作ヒロインのラウラ・ボーデヴィツヒさんらしい。まあ見たときからそんな予感はしてたけど。

…実はIS自体は3巻ぐらいまでしか読んでないんだよな、僕。何か有無を言わせずこの世界に飛ばされたし。

まあ、大体の事情は理解できた。

ちょうど今は、ラウラさんが目の改造を行ってスランプに陥った時と織斑 千冬から鍛えなおされる間らしい。

この様子を見る限り酷いイジメを受けているみたいだな…

なんか今の状況も街での隠密行動の訓練中他の隊員に嵌められてこうなったみたいだし。

さーて、どうしたもんかねえ…？

ま、どーせ助けるぐらいしか選択肢がないんだけど。

第一話 プロローグ（後書き）

初心者なので文も拙いですがよろしくお願いします。
更新はなるべく早めにする予定です。

…ヒロインとかチート能力とか全部AMIDAKUジで決めちゃったのは秘密。

第二話 僕が軍人になった流れとか（前書き）

急展開すぎた。

…すみませんorz

第二話 僕が軍人になった流れとか

~~~~~

あかい

あかい

まあいいけの

まんなかで

ぼくはわらう

ぼくはわらう

そうしたら

めのまえの\*\*が

あかいみずをふいたよ

~~~~~

「それでは、御刻 礼衣さん。『シユヴァルツェ・ハーゼ』へようこそ。解らないことがあったら、気軽に私『クラリツサ・ハルフォーフ』に質問して下さいね」

…どうしてこうなった？

なんでいきなり歓迎の言葉を言われるのか流れが全く理解できない。

特に怪しいことはしてない筈なんだけどな…

|| || || || || || || || || || ||

自分の身の上を言ったことで少し落ち着いたらしいラウラと僕は、その後表通りのカフェでケーキを食べていた。いつも街に出るときは訓練で来ることがほとんどで、あまり外で食べたことのないらしいラウラは周りをきょろきょろしながらバームクーヘンを頬張っている。

…周囲を警戒しているのは解るけど、ぶっちゃけ小動物みたいでかわい。

「で、ラウラさん」

「ムゲ…何だ」

何か幸せそうな顔してる。けど、

「さっき言ってたことって簡単に話してよかったの？」

「あっ…」

やっぱり…

やっぱりこう言うのって、軍の方から拘束とかされるのかな……。早く終わるといいけど。

ま、その後当然僕はラウラさんの訓練の監視をしていたらしい人に取り押さえられ、ドイツ軍に身柄を拘束されてしまった訳で。

身体検査・尋問等々を3日間程やらされた。

ちよつと話をした監視の人に聞いてみると最初は「身元が特定できたらすぐ解放しますよー」とか言ってたのに、2日目辺りから「すいませんもう少し検査させて下さい、お願いですから！」みたいに態度が変わった。

…と言うか監視の人自体が軍服から軍服＋白衣の研究者っぽい人に替わってた気が。

で、それらが終わった直後、連れ出されていきなり軍服に着替えさせられた後いきなりさっきの様な事を言われた、と言う訳だ。

「……………」

「質問してもいいですか」

「はいはい何でしょう、大体の事なら教えてあげますよ。あ、流石に私のスリーサイズとかはちょっと……」

なに言ってるんだこの人。

「いえ、そんなどうでもいい質問ではなくてですね……」

「どうでもいいと言われた……………」

「あー、しゃがんで地面にの字書いてる余裕あったら質問に答えてくださいせん？こつちもツッコミ入れんの面倒なんで。というか本当になんで只の一般人である僕を部隊に？」

「身体能力・思考能力は遺伝子強化兵並み、しかも体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成されており、更に男性なのにIS適正Aなんてイレギュラーの何処が『一般人』なんですか。そんなこと言う口は塞ぎますよ?」

もうやだこの変態。

しかし、そこまで調べてたのか、ドイツ軍。

多分『体内の分泌物を自由に操れる特殊体内ネットワークが構成』
つてのは『ヴェーグル』の副作用だろう。身体能力うんぬんも多分
チート関連。しかし、

「IS適正A?」

そう、これは初耳なのだ。

女性にしか扱えないISは、男性には「IS適正：（なし）」を
出すはずである。

そんな質問をする僕に、

「私達だって解らないんですよ！こっちの方が理由を聞きたいぐらいです！」

いやそんなキレられても困ります。

しかし、どうやら僕がISを動かせるのは（少なくとも検査上では）本当らしく、本当に動かせるなら僕をIS部隊に引き込み、駄目でも特殊部隊あたりに配属させる気らしい。というか、

「あ、御刻さんの日本国籍、消しときましたから」

…逃げ場が無くなりました。

要はあれだろう、『ドイツ軍に入らないと国籍無くなるよ?』といいたいんだろう。さっきの言葉の 所に書いてあった。

まあどっちにしろ、入るしか無いんだろうな……………

「はいはい、入ればいいんでしょう入れば。ちなみに僕の役職は？」

「あ、役職ではないですがあなたと一緒にいたラウラ・ボーデウィッヒさんとタッグを組むことは決まりましたよ」

まあ、それは予想していた。

片や『落ちこぼれ』、もう片方は『いきなり飛び込んできたイレギュラー（しかも男性）』である。

タッグにして隔離するのは考え方としては順当だろう。

「と、いう訳で、改めまして『シユヴァルツェ・ハーゼ』ようこそ、御刻 礼衣さん」

|| || || || || || || ||

その日の午後。

僕は本当にISを動かせるかどうかを試すため、ISの倉庫に来ていた。

「えーと」

多くのドイツ軍関係者が見守る中、黒いIS（量産型らしい。名前
忘れた）に触れる。

触れた途端流れ出てきたモノは、

あか

[illegible]

[illegible]

「グ……え……ア……う……
・
」

いやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダいやだ厭だ嫌だイヤダ

めのまえの朱がまあるくオチテそこからみどりの根がトンデ青がのぼった

……そうか、ぼくはけっきょく

*****なんだ。

|| || || || || || || || || || side shift : ラウラ

「グ…え…アう…」

ISに触れ、装着された途端、いきなりミトキが苦しみ出したのを見て、それを見ていた人々は騒ぎ始めた。

しかし、騒ぐだけで誰も近寄る人はいない。

ミトキから発せられる雰囲気、あまりにも異常狂気じみていただったからだ。

眼の焦点は全くあつておらず、息も荒い。

そして、何よりも小声で発せられている言葉があまりにも狂っていた。

不意に、そんなミトキの姿が自分に重なった。

周りからは奇異の目で見られ、誰も近寄ることのない、その姿が。

そうか、この人も『ヒトリ』なんだな、と。

そう、思ってしまった。

なら、助けてあげなければ。

どうせ、周りの皆は助けようとはしない。私にそうした様に。

だから、これは偽善。

自分が彼を助けたら彼も自分のことを助けてくれるかもしれないという、そんな思考の結果。

そう自分に言い聞かせ、私は一歩を踏み出した。

break shift

壊れかけた自分の思考を引き戻したのは、小さな温かさだった。

その原因を探そうと目線を下にと送ると、僕のことを抱きしめてくれる小さなラウラさんの姿。

抱きしめ方は、まるで壊れ物を扱うように。

不意に、自分がラウラさんを助けた時のことを思い出した。

4人ぐらいの暴漢に立ちむかおうとしていたその姿は、どこか諦めたような眼をしていた。

『どうせ助けは来ない』と。

結局、僕がラウラさんを助けたのは、ただの自己満足とか同情みたいなものだったのかもしれない。

でも、今度は僕がラウラさんに助けられた。

こんな狂ったような僕を。

そのとき、僕はこの世界で初めて、心から温かいという感覚を実感できた。

第二話 僕が軍人になった流れとか（後書き）

感想・意見等お待ちします。

第三話 入隊初日（前書き）

今更になって一話の前書きに誤字を見つけるという致命的なミス
r z

相変わらず微妙な文章です。

第三話 入隊初日

~~~~~

「なあ

ん？」

「来週授業参観だよな」

「そうだね」

「面倒くせえよな、高校一年生にもなって何を親に見せるんだよ。  
どうにかなんないかね」

「今回で最後になるよ」

「は？高校二年生でもやる筈だろ？」

「いいから、来週を楽しみに待てばいいと思うよ」

?????まだ何も終わっていない時の一幕

oooooooooooo

僕がISを暴走させかけた事件から、二週間経った。

事件後一応行った動作テストではISを動かせたはいいものの、ドイツとしても僕としてもあのような事を毎回起こされたのではたまったものではないので、もう一度一週間かけて身体中を検査させられ、精神鑑定等々も受けた。

しかし、結果は『全く異常なし』。

原因が解らないのではどうしようもないので、結果あの人に僕を救ってくれたラウラさんが僕の監視役兼バディとして就くことが確定しただけになっただけらしい。ちなみに僕はラウラさんの補佐兼バディ。

そんなこんなで、実は今日がシユヴァルツェ・ハーゼでの初仕事だったりもする。ついでに今日から軍の宿舎へ正式に住むことになった。日本からの荷物の移動は全部やってくれたみたいで、とても有難い。今日は訓練だけらしいので、『初仕事』といってもそこまで感慨があるわけではない。検査終わってからずっと自主トレしてたし。

…………一度、暇だったのでヴィークル使って自衛トラップだらけの軍施設の屋上飛び回った時はかなり驚かれたな……あれやった後

ラウラは『あれが入隊したての元民間人の動きだと？じゃあ私はなんだ！』とか軽く落ち込んでたし。研究者の人たちも『あのセキユリティ網を突破しただと？それが私たちの限界だと言うか！』とか頭を抱えてた。

あ、ちなみに『現時点で世界唯一の男性IS操縦者の監視役』という大役を任されたラウラは、周囲からも一目置かれる、というか手を出しにくい状態になり、イジメはなくなっただけ。『次は実力でも他の奴らを見返してやる』って気合を入れていた。その様子がかわいかったので、つい撫でてしまったら赤面して殴ってきた。まあ避けただけ。

そんな日の朝、ラウラさんと僕が朝食を食べていると。

「なあ」

「何、ラウラさん？」

「その『さん』付けは止めてくれないか？一応、今日から正式に私とお前はタッグを組むわけだからな」

「そうするのは別に構わないけど、ならその『お前』呼ばわりもやめてくれないかな、ラウラ」

「ふむ、別に良いだろう。ミトキ」

「あー、名字で呼ぶのはなるべくならやめてほしいんだけど……」

こっちの世界での両親の事を思い出すから。あの人達が最後に向けてきた目線は、紛れもなく『バケモノ』を見る目だった。そんなものの、誰も思い出したいとは思わないだろう。

「解った、レイ」

そんな僕の心境を察してくれたのか、ラウラは特に文句も言わず了承してくれた。

あの事件があってから、すごく、といえる訳でもないがラウラの僕に対する態度は他の人に対するそれよりも柔らかくなっていた。僕としても気軽に話しかけられるのはラウラだけなので、かなり有り難かったりもする。

「そつえばさ、ラウラ」

「なんだ？」

「今日の訓練内容って何なの？」

「簡単な基礎体力訓練だけだ、多分な。」

ついでに僕の紹介もする、とのこと。

隊員は全員女性らしい。まあIS部隊なら当然だが

……ラウラも居るし、心が折れるような事もないだろう、たぶん。

|| || || || ||

ついに来たよ、シュヴァルツェ・ハーゼでの自己紹介タイムが。  
今やっと原作主人公の気持ち解った気がしないでもない。

おかしいな、なんで女子が10人程目の前に居るだけなのにこんな  
冷や汗が出るんだろう。

皆さん妙に目が怖いんですけど。『獲物を見る捕食者（性的な意味  
d……ゲフンゲフン）』みたいな。

「えーと、今日からシュヴァルツェ・ハーゼに隊員が一人増えまし



た。彼は『世界唯一の男性IS操縦者』ですが、このことは機密事項に指定されてます。表向きの役職は『ラウラ・ボーデウィツヒ隊員の専属機体整備担当兼アドバイザー』となっておりますので、その辺りの詳しい事情等は後でファイルを渡すので良く読んでおいて下さい。……あ、ちなみに彼の詳細プロフィールが入っている当たりのファイルが一つだけ紛れ込んでm」

「何でそんな変なことするんですかクラリッサさん！？てかそのプロフィールに情報どこから持ってきたんですか！？後皆さん急に目つきを光らせないで！怖いからそれホントに怖いから！」

急に雰囲気を変え僕のプロフィールが書いていると思われる紙を取り出そうとするクラリッサさん（何と驚いたことにシュヴァルツェ・ハーゼの隊長らしい。性格に問題がありすぎる気がする）を全力で止める。

何かとっても先行きが不安なんだけど……

「冗談です」

本当か？それにしても目がマジだった気がするんだけど。

「では、御刻 礼衣さん。自己紹介をお願いします」

この雰囲気で自己紹介かい。余計やりにくくなったよ。  
まあ仕方ないか。

「御刻 礼衣です。さつき『世界唯一の男性IS操縦者』とか凄そうな紹介をされましたが、偶然そんな特性が見つかっただけの一般人ですので、特にそこら辺は気にしないでいいですよ」

「一般人は普通軍施設の屋上を生身で飛び回れるのか……………」

……………うおいらウラ。僕を孤立させたいのかい？  
ほら皆さん「はあ？」とか「そんな身体能力私たちでも持っていないわよ……………」とかドン引きしているし。

まあ、当然その後の訓練では僕の周りにラウラかクラリツサさん以外の人は居なかった訳で。

……………転校デビューならぬ軍隊デビュー、失敗した気がするなあ……………。

……………

そんな悲しい訓練終了後。

僕はクラリッサさんに呼び出しを受けていた。

「何の要件でしょうか」

一応敬語を使った方がいいらしいのでそうする。

「宿舎の部屋が決まったのと、明日研究所の方でまた検査があります」

え、まだ検査するの？もう調べられる所なんて無いと思うんだけど。

「専用機のための適性調査をするそうです。一日で終わるらしいのでそんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」

ああ、そういうことか。

やっぱりデータ取りのためには専用機は不可欠だろうし、どうせなら軍の『切り札』にしたいんだろう。

「そういうことなのでちゃんと忘れないように来てください。後、これが部屋の番号と認証用の身分証です。部屋番号は覚えたらすぐに破棄して下さい。これで連絡事項は以上です」

要は自分で行け、と言うことなのだろう。

仕方なく宿舎の指定された部屋の前に行くと、そこには何故か先客が居た。

「あれ、ラウラ？」

「ああ、レイか……」

あれ、何か落ち込んでる。

「何でそんな調子悪そうなの？」

聞いてみると、

「とりあえずこれを見ろ……」

と、部屋の扉に貼られてた紙を見せてきた。

そこには、

『53号室 御刻 礼衣

ラウラ・ボーデウィツヒ

ッサ』

こんやは おたのしみ でしょうね b y クラリ

クラリッ  
サッ  
あああああああああ  
ん  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

### 第三話 入隊初日（後書き）

クラリッサさん変態淑女化。

感想・意見等々待ってます。

#### 第四話 朝にありそうなこと（ねーよ）（前書き）

戦闘シーンまであと少し。

やっとヴァーケル使いまくれる。

あと8000アクセスと1500ユニーク突破しました。下手な文ですが読んで頂き、本当にありがとうございます。

#### 第四話 朝にありそうなこと（ねーよ）

~~~~~

「本当に*るのかい？」

「うん、そのつもりだけど」

「『*られる前に*る』なんて愚鈍で理想的な方法、君はやらないと予想していたんだけどな」

「それだけ追い詰められてるってことさ。失望した？」

「まさか。むしろ興味をそそられるよ。これだから人間は面白い」

「君も『一応』人間でしょ？何いつてるんだか」

「何百回も『転生』してると、どうしようもなく暇になる物だよ。終いには僕みたいな『人外観察者』になるのがオチさ。」

『そんなものなのかな』

『そんなものさ、イレギュラー転生者なんて』

僕と彼と暇潰しの下らない遊戯の会話

~~~~~

|||||side shift:ラウラ

部屋の前に貼ってあった張り紙についてはレイと二人で見なかった事にして、もう遅いのでとっとと寝よう、という話になったのだが。

「ラウラ」

「何だ」

「なんで裸なの？僕の精神衛生上せめて前は隠して欲しいんだけど」

「だが断る」

何でレイの精神衛生に悪いのが理解できん。

「あー、もうどうでもいいや。おやすみ」

む、流石に『どうでもいい扱い』されるのは心外だぞ。

反論しようにももうレイは寝てしまったようなので、仕方無く私も寝ることにする。

- - - - -

布団の中で考えていたのだが、私はレイに対し少し思い違いをしていたのかもしれない。

というのも、ここ二週間で気がついたのだが、レイが私を見る視線は同類を見るような同情の目だけではなく、どこか『私にあつてレイのは喪われてしまったナニカ』を羨み、私のそれを守ろうとする決意みたいなものが見え隠れしていた。

その『ナニカ』の正体だが、私の知る限りではレイの事を遠ざけた両親に関してぐらいいしか思い浮かばない。しかし、私はそもそも両親がいないし、その事に関しては隠す必要もないのでレイには前に話してある。よって違う。

……………そういえば、私が試験管ベビーであると言ったとき、レイは蔑む事なんてせずに『ラウラさんはラウラさんだから特に気にしないよ』と言ってくれた。ちょっと嬉しかった気もす……げふんげふん。

まあ、その『ナニカ』の正体は全く解らないが、『レイの心の闇は私よりももっと深い』という事だけは感じ取れた。

その上で私に気を遣ってくれているのだから、レイには感謝してもいけない。

……私が、少しでもレイの心を癒せるのなら、してやらんとな。

|||||break shift

朝が来た。

『ヴィーグル』を使えば意識のオンオフは割と容易なため、起きた直後でも頭ははつきりしている。

「……あれ」

ふと隣のベッドを見ると、ラウラはもう居ない。

もう朝食を食べに行ってしまったのだろうか、と思い、自分も急いで準備しようと布団から起き上がると。

「なんでここにいるのさ!？」

「ふぁ……?」

僕の布団の中にラウラが居ました。

しかも寝る前と同じ格好、つまり全裸で。

自分の顔が赤面していくのが解るので、『ヴィークル』に乗って急いで心拍数を調整。

急いで『足』と『手』を『動かし』、急いでベッドの上から降りたところで『身体』を『捻り』ラウラの方向へ向ける。

これで一安心だと思ったら、

「あ、れいだ〜」

ラウラが素早い動きで抱きついてきた。

何とかして抜け出そうとするが、全く身動きがとれない。

どうすればいいのか迷っていると、

ガチャ。

「礼衣さん、そろそろ検査ですので急いだ方が………あ」

あ。

「おつと失礼しました。それではごゆっくり」

ボタン。

「クラリツサさあああん！誤解ですってええええええええええ！」

〓 〓 〓 〓 〓 〓

「すまなかった」

朝食を食べに食堂へ歩く最中、やっと頭が起きたらしいラウラは謝ってきた。

「いや寝ぼけたただけだろうし別に気にしてないけどさ、なんで僕の布団に入ってたの？」

「それが解らんのだ」

「いや解らないってどういふことさ。まさか寝ぼけたと言わないよねっ。」

「レイが私を自分のベッドに連れ込んだのでは無ければ、寝ほけたぐらいしか可能性が無いのだが」

「マジですか」

まあいいけど。

「そういえば、レイも今日適正検査なんだろう？」

「うん、そうだけど・・・ってレイ『も』って事は、ラウラも検査するの？」

というかまだ専用機無かったのか。

「そのようだ、仮にもレイは私の専属機体整備担当と言うことになってるからな。専用機がないと怪しまれる」

ああ、そういうことか。

その後も他愛のない雑談を二人でしながら朝食を取り、施設内のIS専門研究所に一緒に行った。

..... なんかその様子を見た一部から「新入りの御刻 礼衣隊員

とラウラ・ボーデウィツヒ隊員が恋仲である」なんて噂が流れ始めたらしい。余り悪い気はしないけど……げふんげふん。

そんなこんなで検査会場。

僕もラウラも身体検査等々は終わっているの、何を検査するのかと話を聞いたところ。

「あ、戦闘傾向のデータ取るからとりあえず二人でテスト専用機使って戦ってみて」

……はあ？

#### 第四話 朝にありそうなこと（ねーよ）（後書き）

戦闘まで行けなかった・・・orz

ウィークルの機能ってあんな感じで良かったんですけど？

感想等々お待ちしてます。

後、もしかしたら明日と23日は投稿できないかもしれませんが  
詳しくは活動報告にて。



## 第五話 模擬戦前（前書き）

戦闘入れなかったorz  
焦って書いてしまった。

## 第五話 模擬戦前

~~~~~

「ねえ」

「何だい？」

「君は何故いつもここにいるの？学校は？」

「転生する度何回も同じ内容の授業を受けるのは苦痛だと思わないかい？それなら外で暇を潰した方がよっぽど有意義だ」

「そんなものなのかな」

「そんなものだよ、ボクの人生なんて。君も転生すれば解と思うよ？」

「いや、遠慮しとくよ。何か大変そうだし」

「それは残念」

僕と彼とのいつかの会話

~~~~~

「では、模擬戦のルールを説明します」

ろくに文句も言えないまま、ラウラと模擬戦をする事になってしまった。まあデータを取っていないものといえはこれぐらいしかないので、仕方ないのだが。

「シールドエネルギーの初期値は両者共に600、武装は適当に詰め込め込め……格納領域に様々な種類のものが入っているので、自分で自由に」

「今絶対に『適当に詰め込んだ』って言いかけましたよねえ!？」

「気のせいです」

嘘だ。

「気のせいだろう」



ちなみに僕の『ヴィークル』の操縦席は、いつもは初代ガ ダムの  
コックピットみたいな感じである。しかし、ISに乗った時はア  
ツクスみたいな全天候リニアシートみたいな形状に変化する。どう  
やら『ヴィークル』側でISのシステム関連をうまくシームレス化  
しているらしく、ハイパーセンサー内で認識している範囲もちゃん  
と可視化してくれるみたいだ。

ほかにも、『武装一覧』を呼び出してそのまま武器をコールしたり、  
シールドエネルギーや各武器の残弾数、ISの損傷箇所・損傷レベ  
ル等も『ヴィークル』から簡単に確認できる。

悪くなった点と言えば、IS側の生体補助機能のせいで一部の体内  
物質の分泌量が全く調整できなくなってしまった事ぐらいだろう。

以上前の動作テストで確認したこと終わり。

『ヴィークル』の展開が終わり次第速攻で『条件反射』のパネルを  
開く。

生体時計と照らし合わせながら、ちょうど試合開始と同時になり次  
第『マシンガン』をコールして、右に移動しつつ『ラウラ』にオー  
トで照準を合わせ発砲できるようにプログラムする。

プログラミングが終了し、開始まであと15・1925秒となつた  
とき、ラウラの方から通信が来た。

「レイ」

さすがに返答しないのはまずいので『声』を発する。

「なに、ラウラ?」

開始まであと7秒。

「本気で行く」

あと4秒。

「奇遇だね、僕も同じことを思っていたよ」

2秒。

1。

「「それでは、始めよう」か」「」

戦闘が、始まった

## 第五話 模擬戦前（後書き）

感想お待ちしてます。

追記

誤字見つけたorz  
修正しました。

## 第六話 模擬戦（前書き）

やっと戦闘入りました。  
かなりテンポ悪いです。



## 第六話 模擬戦

~~~~~

『平和は犠牲の上に成り立っている』という言葉は、皆さんも時々耳にする事があるだろう。

無論、日本人のほとんどは『平和』の側に生活している。

さて、その『平和』の中で生きている人の中で、見ず知らずの『犠牲』側の人間をいつも気にして生きている人はどれ程いるだろうか。

……恐らくは極少数しかいないだろう。自分の身の回りにそんな人間がいたら、まず偽善者だ嘘つきと思ってい。本来そんな事をしていたら、直ぐに精神が狂ってしまう。

その点で彼は非常に不幸だ。なにせ嫌が応にもその存在を知覚しなければいけない所に、自分の平和の下にいる『犠牲』がいたのだから。

……さて、彼はどんな選択をするのか。自分の立場上干渉しにくいのがもどかしいが、これから非常に楽しく暇潰しになるだろう。

ある人物の日記から

~~~~~

戦闘開始と同時に、さつき組んだ『条件反射』<sup>プログラム</sup>が作動。大きく右に移動しながら、ラウラに向けマシンガンを乱射。だが流石に向こうも訓練を受けた軍人である。一瞬こちらの攻撃の早さに驚いたようだが、直ぐに持ち直し被弾を最小限に抑える。そして直ぐにマシンガンで応戦。

少し被弾しながらも回避したのだが、ここで大きな問題が発生した。

「（思考加速も使えないのか、まずいな……………）」

『ヴィークル』の機能である、思考の高速化が出来ないのだ。多分ISの生体補助機能辺りと干渉したのか、全く稼働しない。

当然それがなくても動く事はできるのだが、さらに悪いことにISと『ヴィークル』の間に僅かな反応の遅延があるせいで、動作のコントロールが難しい。

そのせいで回避した後も更に被弾してしまい、シールドエネルギーがじわじわ削れていく。

仕方ないので『ヴィークル』でラウラの武器の向きから弾道を予測、可視化してそれを頼りに回避、攻撃を繰り返す。

しかし、それでもすべて避けきれない。

何か策はないかと『武装一覧』を呼び出すと、一つの案が思い浮かんだ。

直ぐに右手にスナイパーライフル、左手にブレードをコール。

「レイ、ふざけているのか？」

「こうでもしないと勝てないと思って、ね  
！」

「なっ!？」

ブレードを前方に突きだしながら加速。

流石にこんな単純な攻撃をすると思っていなかったのか、ラウラは焦ってブレードを呼び出し応戦しようとする。しかし、

「甘いよ」

ラウラがブレードを構えるのを確認し次第、僕は右手のスナイパーライフルを構え、ラウラに<sup>目標</sup>発砲。  
ラウラのシールドを削っていく。

「不意打ちとは、やってくれるな……………」

そう言ったラウラが構えたのは、大型の荷電粒子砲。おいこっちに

はそんなの入ってなかったぞ。

とは言えあれに当たるのは不味いので、射線予測で急いで回避。  
しかし、その先にいたのは。

「ラウラ!？」

「さっきの甘いという言葉、そのまま返させてもらっ

いつの間にか移動し、ブレードを構えたラウラだった。急いで回避しようにも、ISの反応が遅いせいで移動できない。  
仕方ないので左手のブレードで受け止めるが、押しきられそうになる。

急いで右手のスナイパーライフルを構え、照準を適当に合わせ発射。  
当てることはできなかったが、体を離すことには成功したので、急いで体勢を整える。

「よくかわしたな、レイ。それが本当につい最近まで民間人だった奴の動きか？」

「誉めてくれてるのかな、それは」

「そうだが？」

「それは嬉しいな、だけど」

「容赦はしない」

二人の言葉が重なると同時に、僕はラウラに向かって突っ込み

「あ、データ採れたんでもういいですよ」

ガタン。

「はあ……………」

研究者の介入によってISが停止したせいで、唐突に試合は終わってしまった。

|||||

そんな戦闘終了後、まず二人でやった事は研究者をぶっ飛ばす事だった。

そいつは「すいませんほんの出来心だったんですゆるしてくださいsギイアアアア」何て断末魔をあげていたが、そんなもの僕らの知ったことではない。真剣な戦いを邪魔した罪は重いのだ。

その後、ほかの研究者に個人的な要望（反応の遅さとか思考加速の事とか）を伝え、ラウラと一緒に宿舎に帰ることにした。

「ラウラ」

「何だ」

「さっきの勝負、いつか決着つけよう」

「そうだな、私もあんな結末では納得できん」

そう言って笑うラウラ。かわいい。

なでなで。

「ふにやつー!? ..... な、撫でるなあ!」

「あはは」

顔を真っ赤にして殴って来たので、僕はラウラに捕まらない程度にゆっくり逃げることにした。

..... 一方、その様子を見た他の人たちは。

「なにこの甘い雰囲気」と思ったそうな。

||||| side shift: ドイツ軍研究者のみなさん

「あの男性操縦者の方からISの反応が遅いと苦情が来た」

「何？あの実験機は専用機並みに反応が速いはずだが」

「ならどうすればいいんですか！？」

「仕方ないが、『アレ』を使うしかないか……（使いたいだけ）」

「『アレ』をやるとか、本気ですか？」

「なるべくなら避けたかったが、まあ仕方ない……（ほんとはすげーヤル気）。VTシステムは開発放棄だ。あんなものをダラダラ作り続けるよりも、急いで『アレ』を完成させるぞ！」

「……………了解です！！！！」「……………」

彼らがVTシステムの開発を全力でスルーしてまで開発しようとしたもの、それは

AMS (Allegory Manipulation System) である。

## 第六話 模擬戦（後書き）

弟から「ACFAネタ入れようぜ」という毒電波を受信したのでAMS搭載フラグを建てました。でもこれ以上ACFAネタを入れすぎるのはやめます。多分しつこくなるので。

ついでにVTシステムがどうか逝ってしまった気がするけど気にしません。

…… ヴィークルとAMSってかなり相性がいい気がする。

追記：一応用語解説（ravenwood.jp様より転載、一部改変）

Allegory Manipulate System 【略称】  
：AMS

脳と機械の制御装置を接続し、操作を思考によって行うという次世代型アーマード・コア（ネクスト）の制御方式。

機械と行う電気信号でのやり取りを正確に処理できなければならず、使いこなすには先天的な才能（AMS適正）を必要とする。

接続者の適性が低い場合は非常に大きな負荷がかかり、脳や神経を損傷する可能性がある。元々は身体的欠損を補うための医療技術として研究されていたが、このために民生化できなかった。

その操作速度、精密性から次世代型アーマード・コア（ネクスト）の操縦方式として採用される。



この方式でない場合、ネクストの操縦には完全に連携できる数十人のチームが必要になるらしい。

稼働部分を簡略化したりすることで負荷は低くなるようである。逆に精密すぎたり稼働部位が多い装置ほど高いAMS適正を要求されるらしい。

ちなみに本作では、「AMS適正自体は必要ないが、AMS関連のシステムを構築するときには個人にあわせ一つ一つ作る必要がある」という設定にします。

閑話『彼と僕の出会いと、彼の興味対象が僕になったワケ』（前書き）

今日は部活で山に登ってるのでテストもかねて予約投稿。

今回はいつも本編の上に書いてるアレの少し長めバージョンです。

閑話『彼と僕の出会いと、彼の興味対象が僕になったワケ』

|||||shift: dream

これは、僕がまだ狂う前のおはなし。

彼と初めて出会ったのは、高校の入学式があった帰り道、公園での事だった。

その頃の僕は『あの事』を理解してしまったせいでかなりショックを受けていた。

ただでさえ荒んだ視界の中、公園の彼に気がついたのは、全くの偶然だろう。

なにせ彼はただでさえ目立つ筈の銀髪で、更に公園の広場のど真ん中に立っていたにも関わらず、全くと言っていいほど存在感が無かったのだから。

そんな彼にぎょっとして立ち尽くしていると、彼がこちらに気が付いたのか、ゆっくりとこちらに歩いてきた。

一瞬逃げようとも思ったが、別に逃げる必要性を感じなかったのでものまま立ち止まる事にした。

彼は僕の目の前に立つと、

「いやはや、まさか気付かれるとはね」

と言いながら笑った。

「上手く気配を消したと思ったのだけれど」

「なぜ気配を消そうとしたの？」

「なに、ほんの酔狂さ。そうした方が僕の趣味がやり易いからね」

「趣味って？」

「世界の観察。長く生きていると、そのぐらいいしか楽しく思える趣味が無くなるものでね。まあもつとも、これもあまり楽しいとは思えないけど」

「『長く生きてる』と言うには、君は若すぎると思っけど？典型的な中二病かい？」

「中二病とは失礼な。僕は転生者なんだよ」

「はいはい中二病乙」

……そうは言ったものの、その後の話を聞いているとそうは思えなくなってきた。

空想の出来事にしては、あまりにも内容が細かすぎる。  
結局、

「解った、信じるよ」

と言わざるを得なくなるまでに。

僕が彼に降参した後、彼は

「さて、君の話を聞かせてくれないかい？」

と話を振ってきた。曰く、

「他人の話は、僕にとって最高の暇つぶしだからね」

らしい。

一瞬話そうか迷ったが、さっきの彼の話が本当なら彼に逆らっても

どうしようもないので、僕の話をすることにする。

|| || || || || ||

僕の話聞いた後、彼は

「興味深いね、君の人生は」

と一言だけ感想（？）を言った。

「久々に面白い事を聞いたよ。ありがとう」

「僕の人生はそんな扱いか……」

まあいいけど。

「明日もここに来てくれないかい？その話の続きを見たい」

「えー……」

流石にそれは嫌だ。こっちの精神が持たない。

「僕なら君を救えると思うけど?。」

「なんでそんなことを?。」

「なに、暇つぶしさ」

そんな事を彼は言ったが、こちらとしてはなんでもいいからすがり  
たい気持ちではある。

本当に彼が転生者なら、人生経験も豊富だろう。

「なら解った、明日もここに来るよ」

それが、彼と僕の始まりだった?????????

|||||dreamend

「起きろ、レイ」

「ああ、ごめん少し寝てた」

少しうたた寝していたら、心配そうな顔をしたラウラに起こされる。

「どうした?寝ながら泣いていたぞ?。」

多分『まだ普通だった頃』の夢を見たからだろうか、僕は寝ている間に泣いていたみたいだ。

……思えば、あの頃は確かに辛かったし、幸せだったと言い難いけど、まだ楽しかった。

そしてその日々さえも、もう戻らないのは解っている。

でも、

「ねえラウラ」

「何だ？」

「こんな壊れた僕でも、幸せに生きていけるのかな」

「当然だろう？ レイはレイだ。自分の幸せを見つけれられる筈だ。…

…まあ、何処かの本の受け売りだが」

「ありがとう。それでもすごく嬉しいよ」

??????? 少しぐらいだったら、甘えてもいいよね。



閑話『彼と僕の出会いと、彼の興味対象が僕になったワケ』（後書き）

ちなみに作者はこれが投稿される頃に山頂にいます。

感想等お待ちしております。

## 第七話 越界の瞳とAMS

（ドイツ軍変態研究者の本気）（前書き）

投稿遅れたー！ー！orz

相変わらずの駄文ですが、皆さんからのアドバイスで少しはマシになってくるかなーと思っていたり。

本当にありがとうございます。

## 第七話 越界の瞳とAMS

（ドイツ軍変態研究者の本気）

~~~~~

彼の人生の話は僕の暇を潰すには十分だった。

いや、本当に興味深いのは彼自身かもしれない。

なにせ、彼は自分の下にある『犠牲』に気が付いた上、その『犠牲』に無理矢理にでも手をさしのべようとしているのにも関わらず、自己の精神を非常に危ないところではあるが安定させつつある。

.....その『犠牲』が本当に救いを求めているかなんて全く気にせず。

さて、彼がそのことに気がつき、心の安定が崩れたとき、彼はどんな行動をするかな？

非常に楽しみだ。

ある人物の日記より抜粋

「一夏、何をやっている？」

「おっと誰かと思ったたら姉さんか。驚いたよ」

「さつきから後ろにいたんだがな。で、何をしていた？」

「いや、ただの中二病小説を書いていただけさ」

「おまえは何をやっているんだ……。まあいい、風呂が沸いたので先に入っているぞ」

「はいはい」

「ふう。危うくバレル所だったよ。まさか前世で見た面白いものについて色々と纏めてた」なんて言えないからね。さて、『彼』は今どんな様子かな……？」

~~~~~

中途半端に終わってしまった模擬戦から二週間後。

僕らには特に何事もなく、クラリツサさんにからかわれながらも二人で訓練を続けていた。

ラウラは頑張って訓練をしていたおかげで、部隊内の成績ランクでは一番下から上位3分の1に入るまでになっていた。

ちなみにラウラが僕の布団に入ってきたのは最初のあの日だけで、翌日からはちゃんと別の布団で寝ていた。あいかわらず全裸ではあったが。

……僕？相変わらず孤立してますよ？  
ちよつと訓練中張り切つて本気出したりすると毎回ドン引きされま  
すから。

そんな日が続いたの朝のこと。  
僕とラウラは、

「……………状況説明ぶりーず」

「面倒なのでイヤです」

起きたら何故かドイツ軍の研究部門に拘束されていた。

「いやいや明らかにおかしいでしょこれ。何で僕もラウラも何か手  
術台みたいなのに縛られて乗っけられてるんですか？」

「面倒なので以下略」

未だ寝ているラウラが羨ましい。一体どんな状況か誰か説明してく  
れよ……………

「リーダーである私が説明しよう！」

「何か変なのキターー！」

いきなり白いマントとサングラス掛けて格好つけてる良く解らない  
女性（多分研究グループのリーダーらしい）が現れた。何で貴女そ

んなノリノリで登場したのとか何時からスタンバイしていたとかいろいろと聞く事はあるが、今の所説明してくれそうなのは彼女一人なので黙って話を聞くことにする。

……………他の研究者の方々が『ああまたか』みたいなすっぱー疲れきった顔してる。お疲れ様です。

「突然だが、君達には手術を受けてもらおう！」

「本当に突然ですね」

というかテンションが高過ぎです、ラウラが起きるでしょうが。

「このテンションが素だ、よって下げる気もない！しかもボーデヴィツヒには事前に事情説明をした上で麻酔で眠らせてあるだけだ！」

「ならいいです」

なんか心読まれた事には突っ込まない。話が進まないし。

「さて肝心の魔改……………手術の事だが」

「今絶対に魔改造って言いかけましたよね」

まあいいけど。

「まあ簡潔に言うと、君達の専用機のために必要なんだ」

「へー」

搭乗者に手術が必要なISってどんなだよ。

「君は模擬戦の時、『反応が遅い』といったらしいな」

「ええ」

確かに言いましたけど。

「そこで私は考えた、『皮膚通しての通信が遅いなら、脳に配線組んで直接やりとりさせれば良くな？』と！」

「わあいとてもマッドな考え」

てかそれ何かAC4系のAMSに似てないか？この世界にもACシリーズ自体はあったし。

「ちなみに参考にした、というかぶっちゃけ丸パクリしたのはクリッサから借りたこのゲームだ。まあ私にはゲームスピード（機体速度的な意味で）が速すぎて全然進められていないがな！」

「もしかしてゲーム下手？」

「うるさい黙れ気にしてるんだ私も！」

似てるとかそういうレベルじゃなくて、まんまACFAでした。と  
淑女  
いうか元凶は、相変わらず変態加減がメーター振り切ってるあの人が。あんた何処へ行く気だよ。

「まあそういう訳で、君たちに処置を施す」

「別にいいですけど、具体的にはどんなことを？あと僕が了承した瞬間目がギラギラさんの怖いのでやめて下さいホントマジ怖いんでお願いですから！」

まっどさいえんていすとして怖いね。

「チツ仕方ない……」ヴォーダン・オージェ内容としてはAMS用の脳内回線を作るだけだ。あ、ついでに『越界の瞳』も付けるか？ボーデヴィツヒの瞳をメンテするついでだ」

「どうせ断つても『手が勝手に動いた』とか言ってやるつもりですよ……」

「当たり前だ」

いやそんな『キリッ』とかされても。

「と言うかメンテなんてできるんですか？」

「脳内回線を配線するときに、以前のタイプの『越界の瞳』ヴォーダン・オージェだと一部邪魔になる箇所があるからな。」

いいのかそれ。もう一回『越界の瞳』ヴォーダン・オージェを搭載し直すんでしょ？

「理論上は可能だからいいんだ。瞳の色は治せない上に、『越界の瞳』ヴォーダン・オージェが本来持つている機能を最大限使うこともできないが、少なくとも制御不能状態からは抜けられるだろう。ただし本当にそうなる



かは一切保証できないがな！」

「だめじゃん」

本当にこんな人にリーダー任せて大丈夫か？  
ドイツ軍よく雇ったな。

「まあいい、とつと始めるぞ。」

「いやちよつとまつて「問答無用だ」はい……」

結局無理矢理押し切られる形で麻酔をかけられ、僕は眠りに落ちた。

|||||

手術が終わり、僕はベッドの上で目覚めた。

話を聞く限り、二人とも手術は成功。

ラウラの『越界の瞳』<sup>ヴォーダン・オージェ</sup>も、一応機能回復はしたそうだ。

そして僕とラウラの首筋には、AMS接続用の端子が埋め込まれた。

手術前にも少し疑問に感じていたので、なんでラウラにもAMS端子を付けたの、とあの人に聞いてみると、

「手が勝手に動いた」

とドヤ顔をしゃがったので、とりあえず投げ飛ばすことにした。

まあ頭を色々いじられたのかもしれないけれど、僕もラウラも無事なので、まあいいかなと妥協することにする。

……専用機、楽しみだなあ。  
ラウラともちゃんと戦いたいし。

## 第七話 越界の瞳とAMS

（ドイツ軍変態研究者の本気）（後書き）

ご意見・ご感想お待ちします。

そして『彼』の原作介入フラグが立った感じがしないでもない。

## 第八話 ある日の訓練風景・そのいち（前書き）

お気に入り件数130件突破、累計PV40000超え&累計ユニーク8000超えですって。

……皆さん本当にありがとうございますm(´▽`)m

## 第八話 ある日の訓練風景・そのいち

~~~~~

『誰だ』

「もしもし、『僕』ですよ」

『ッ！貴様か、我がドイツ軍を

』

「僕に対して何て口の聞き方なんだい。一応、僕の方が立場が上なんだけどな？」

『クッ……。それで、今回はどんな^{脅迫}ご用件で？』

「何、そんな大した事じゃないさ。君達、礼衣に強化手術、確かAMSと何とかの瞳だっけ？やったんでしょ」

『行いましたが、それが何でしょう？』

「まさか、『それ以外』の事もやってないよね？」

『ッ！……………はい。やっておりますん』

「ま、ここで嘘ついてもすぐ解るんだけどね。一応釘を刺しとこう
と思つて。折角預けてやっているんだ。観察対象僕の大親友を
下手に傷つけるような事があつたら、許サナイデスヨ？」

『ヒツ、り、了解しました！』

「それじゃあ、またいつか。

全く、道化も楽じゃないよ。まあ、観察対象親友の安全を守れ
るなら、それでいいけど」

~~~~~

僕とラウラは、手術後の療養期間も終わったので、また訓練に復帰  
していた。

A M Sはまだ使う機会が無いので使っていないが、越界の瞳の調子は上々である。

……………というか裸眼で一キロ先見えるとか、やっぱり凄い。

そして専用機については、あのよくわからん研究者が

「よっしゃ後は最終調整だけだぜえええええええええええい！」

と施設の屋上から叫んでいるのを前に見かけたので、多分もう少しなんだろう。というか今更だけどあの人頭大丈夫か？

さて、そんなことはさておき、今日も訓練の日である。

今回の内容は余り乗り気でないのだが、来てしまった物は仕方ない。その内容とは、

???????? 『格闘戦』である。

|||||

「今回のメインはトーナメント制にして、残りの待機中の隊員達は試合中の人たちを見て学習することにしましょう」

訓練を始める前、クラリツサさんがそう言った。

まあ確かに、訓練方法としては妥当だろう。割と皆さん熟練の人たちだし、練習のしすぎで下手にけがをするよりも、集団行動の時に活かせるよう他の隊員の動きを見てクセを把握しておいたほうがいいだろうし。

まあそんなこんなでトーナメント表が表示されたのだが、

「なんで僕だけ孤立してるんですか」

何と僕は決勝戦まで出番が無かった。

「多分礼衣さんとまともな勝負ができるのはこの隊でも極少数でしょうし、なにより実戦でもないのに男性と戦うのはちょっと……みたいな人が多いので」

「なら仕方ないですね」

確かに、ISが登場した今もIS無しだったら男性が強いし、同じ隊とは言えとても親しい訳でもない男性に体を触られるのは嫌だろう。

そんな訳で、僕は出番が来るまで試合観戦をすることにする。

………ラウラ以外誰も話掛けてくれなかったのが、地味に悲しい。

|||||

「やっと出番が来たぜヒャッホウ！」



「何かテンションがおかしくなっていないか？」

おっとこれは失礼。

ラウラに指摘されたので、テンションを修正。対戦フィールドへ向かう。

ちなみにラウラは準決勝でクラリッサさんに負けた。まあ身長差利用されて攻撃されてたから仕方ないね。

ということで、僕の対戦相手はクラリッサさんである。

対戦ルールは簡単。『相手の背中を地面につけられたら勝ち』だ。

「では、両者準備して下さい」

そんな合図と共にフィールドとなっている草むらに二人で向かい合っ

って立ち、開始のブザーが鳴るのを待つ。

その間に『ヴィーグル』を起動し、『条件反射』でブザーが鳴った瞬間に踏み込んで一撃を加えられるようにプログラム。

「礼衣さん」

「何でしょう？」

「あの……（男性との戦いは）初めてなので、優しくして下さいね？」

そこでその台詞を言うか。括弧内なかったら意味が凄く変わってくるんだけど。

多少心拍数が上がったので、急いで修正。

丁度ブザーが鳴ってくれたので、僕はクラリッサさんに向かって突っ込むことにした。



## 第八話 ある日の訓練風景・そのいち（後書き）

相変わらず短えorz

ご意見・ご感想お待ちしております。

あと土日の少なくとも片方は更新できないかもです。

## 第九話 専用機（前書き）

昨日は投稿できずすみませんでしたorz  
その代わり今日は文章量多めです。いろんな意味で。

## 第九話 専用機

~~~~~

ずずず。

「ふう……………」

ずぞぞぞぞ。

「はふ……………今日は平和だ。茶がうまい」

~~~~~

ある日の朝、訓練に行こうと部屋のドアを開けると。

「待たせたな！」

「……………」

ボタン。

「どうしたレイ、遅れるぞ？」

「いや、ちょっとね……………」

言えない。『ドアを開けたら目の前にサングラスとマントを羽織った変態がいた』なんて、幻覚のはずだ……。

「？……………まあいい、行くぞ」

ラウラが不思議そうな顔をしながら、ドアを開ける。

ガチャ。

「やらないか」

「……………」

ボタン。

どうやらラウラにもアレが見えたらしい。無言ながらも全力で目線を逸らしながら扉を閉めていた。

「なあ」

「何？」

「今見たものを全力でスルーしたいのだが、何かいい案はないか？」

「正直僕もそうしたいけど、案がない」

「ならこの私が提案してやろうか？」

おおそれは助か……………って。

「どっから入ってきたんですか貴女」

気がついたら知らないうちに部屋に侵入されてた。

「勘だ」

まっどさいえんていすとして凄いな。

「後私の名前をいい加減覚えてくれ、寂しくて泣くぞ?」

絶対嘘でしょ。まあいいけど。

「解りましたよ……………ヘルマさん」

「よろしい」

僕とラウラの目の前にいるサングラスの変態、ぶっちゃけ前に僕らを手術したこの女性の名前は『ヘルマ・ハルフォーフ』。早い話がクラリッサ変態……………隊長の母親である。

ただでさえ『変態』のクラリッサさん相手に話しても疲れるのに、その母親である『変態の中の変態』ヘルマさん相手だと最悪こちらが死ぬ。主に精神的に。

そのため、あまり長く話したくはないのだが。

丁度よく、ラウラが用件を聞く。

「で、ヘルマ。用件は何だ。まさか暇潰しではあるまい?」

「そのまさかだ」

えー。

「嘘だ」

「なあ、こいつ殴っていいか？ いいよな？」

ラウラが額に青筋を浮かべる。

まあさすがに殴るのはまずい、というかこのままだと話が進まない  
ので、用件を聞き直す。

「まあまあラウラ落ち着いて。で、本当の用件は何ですか？」

「仕方ない本題に戻るか。簡単に言うとだな……」

お前らの専用機ができた」

「「おおー」「」

何かこの事実を聞くのにとっても時間が気がしなくてもない。

＝  
＝  
＝  
＝  
＝  
＝

「よし、フォーマットとフィッティングは完了したな」



あの後僕とラウラはヘルマさんに連れられ、渡されたISを装着した。

ちなみに僕が渡されたのは『シュヴァルツェア・ヴォルフ』という名前の機体。

全体のカラリングとしては黒地に青のラインが走っており、背部には中心の大きなスラスターと4つのウイングスラスター、非固定浮遊部位には羽っぱい形の実弾シールドが付いている。体を委ねるところには当然AMS端子。

主武器は大型プラズマ手刀『ゲファールン』と遠く近全距離対応双発型プラズマライフル『ナフトフォーゲル』、そして16本のワイヤーブレード、ついでにAIC。

何でワイヤーブレードがこんなに多いのかヘルマさんに聞いてみたところ、

『大丈夫だ、お前にAMS接続したらやれるっぽいぞ』

『ぽい』ってなんだ『ぽい』って。

あと、『思考加速』が出来るようにと、生体補助機能も切ったらしい。

……アレって確かISのシステムの根幹辺りにあるんじゃないかなかったっけ、どうやったんだろ？

まあいいんだけど。あの人なら何やってもおかしくないし。

ラウラの機体は原作通り『シュヴァルツェア・レーゲン』だが、ワイヤーブレードが上記と同様の理由で10本に増え、プラズマ手刀が大型の『ブルーム』になっている他、荷電粒子砲が荷電粒子ガトリングガン『5・8・1』になっている。エネルギー効率の方は一応大丈夫らしいが、ガトリングガンの制御にはAMSが無いとき

つiraしい。

以上簡単な機体説明終了。

今回はフィッティングついでにラウラとの再戦もやるつもりだ。

ヘルマさんも、

「お前ら戦うんだろ？適当にやってみろ。私としても機体の出来を見たい」

と言ってくれたので、今回は最後までやれるっぽい。

やったねたえと「おいやめろ」また思考読まれた……だと……？

|| || || || || ||

二人でIS訓練用の戦闘アリーナ上に静止。

待機中、『条件反射』のプログラムついでにラウラに話掛けることにする。

『ねえラウラ』

『何だ』

『機体の調子どう？』

『上々だ。そちらこそ大丈夫か？』

『こっちも万全だよ』

『そういえば、何で個人間秘匿通信で通話している？』

『試してみたかっただけ』

『……そうか』

ため息つかれた。まあ仕方ないか、僕もやりたかったただだし。

「そろそろ始めるぞ。30秒前」

ヘルマさんの声でカウントダウンが始まる。

それと同時に『条件反射』の項目の最終調整を始める。試合開始と同時に『ナフトフォーゲル』をコール、一気に距離を離しながら遠距離モードで狙撃できるようにセット……完了。

試合開始まで残り10秒。

『じゃあ始める？』

『そうだな』

5 / 4 / 3 / 2 / 1 ..... 0

「あのときの続きを」

試合、開始。

ラウラが『5・8・1・』を構えて撃ってくるが、初撃だけはあつ

たたものの急いで後ろに下がることで残りは回避。

十分距離を取つたら『ナフトフォーゲル』を遠距離モードにセットし、狙撃?????ヒット。

追撃はせずに、大きく左へ移動。

ラウラが『5・8・1』で応戦してきたが、これなら回避できると予想。

しかし、

「予想以上に弾速が速いね……」

「ああ、私も驚いた」

いくらガトリングガンとはいえ、荷電粒子砲である。

普通のカトリングガンとは比べものにならないほど弾速が早い上、一撃の威力も高く、射程も長い。

仕方ないので『ナフトフォーゲル』を連射モードにしながら発射、ラウラに急速接近

『5・8・1』での攻撃を受けるが、思考加速で体感時間を延長、回避できるだけ回避し、残りはシールドで防御。

すれ違いざまにワイヤーブレードで攻撃を仕掛けた後、一気に離脱する。

ラウラも負けじとスラストの出力を上げ、一気に接近してきた。急いでワイヤーブレードを4つほど出し攻撃を加えようとするが、ラウラもワイヤーブレードで応戦。全て防がれる。

「その程度か?レイ」

「んー、じゃあこれならどう？」

ワイヤーブレードを16本全て射出。そのうち6本をラウラの後ろに回り込ませる。

ラウラも応戦しようとするが、ワイヤーブレードの本数が足りないため、一部を『ブルーム』で応戦。するが、対応しきれずだんだんと僕の方に近づいてくる。

ラウラの距離が十分近づいた瞬間、A I Cを発動。ラウラの動きを縛る。

「なっ…聞いていたがこれほどまでとは……」

「やっぱり全然動けない？」

「ああ」

やっぱりつよいねA I C。

とはいえラウラの動きを縛ることが出来たので、このまま『ナフトフォーゲル』を近距離モードにセット、発砲。

ラウラのシールドエネルギーを5分の4程削り、このまま勝てるかなーとか思ったその瞬間、

「あれ、動けない」

「当たり前だ、私が掛けたのだからな」

ラウラにA I Cを掛けられた。

そして僕が一瞬集中を切らした瞬間、ラウラは『5・8・1』を構え発砲。

こちらのシールドエネルギーを大きく削っていく。

何とかしてワイヤーブレードを射出、攻撃し、シールドエネルギーが0になる前にAICから抜けられた。

埒があかないので『ゲファールン』をコール、そのままラウラの懐へ突っ込む。

「くっ!？」

「これで、決める?????!」

ラウラが急いで『ブルーム』を展開したのが見えた瞬間、

世界が、白く変わった??????????

|||||worldshift

「……………あれ？」

「ここは何処だ？」

戦闘中だったはずの僕とラウラは、何故かよくわからない白い空間にいた。

しかし、全てが白い訳ではなく、所々に本が散らばっている。

「この本は何だ？」

「何だろうね？見当が付かない」

まあ立ち止まってもどうしようもないので、二人で本を取ってみると。

「これ、ラウラの名前が書いてある」

「これはレイの名前が書いてあるな」

二人で互いのぱらぱら捲ってみると、その中にはそれぞれの相手が過ごした今までの人生が書かれていた。

ラウラの人生は、実験施設で生まれて兵士としての教育しか受けなかった人生。

僕の人生は、学校で人を\*し、その後この世界に来た人生。

「ねえラウラ」

「何だ」

「ここに書いてあることは本当？」

「そうだが、それはレイもなのか？」

「?????うん、そうだけど」

|||||side shift:ラウラ

レイの人生は酷い物だった。

守ろうとした物を守れず、最終手段として殺しを働いた。

そして死ぬ間際、守ろうとした物に裏切られ、絶望の中殺されこの世界に流されて来た。

今まで誰も気がついてやれなかったレイのそんな暗い感情。

もしかしたら、私は少しおかしいのかもしれない。

だって、レイの心のどす黒い闇を見てしまったにも関わらず彼を受け入れようと思えるほどに、彼を好きになっていたのだから。

始まりは助けて貰ったときから。

そして私の生い立ちの事を話したときも、レイは特に何も言わず受け入れた。

私の訓練中にさりげなくサポートしてくれたのもレイである。

だから、レイが

「どう思った？僕の人生」

と言った時も、



「特に気にしないぞ？レイはレイだからな」

と答えられた。

彼の心を、少しでも軽くするために。

|||||break shift

「特に気にしないぞ？レイはレイだからな」

そう言われたとき、僕はとても驚いた。

てつきり、こんな屑みたいな人生を送ってきた僕を軽蔑するかと思  
っていたからだ。

そんな一言で大げさななんて思うかもしれないけれど、僕としては  
とても嬉しかった。

そして、好きになってしまった。

こんな僕を受け入れてくれたラウラを。

|||||inner psychological world:  
end

試合終了を告げるブザーの音で、僕らは元の世界に戻った。

結果はラウラの勝ち。

ギリギリで『ブルーム』が当たる方が早かったらしい。

戦闘後はそのまま宿舎に帰り、その日は休むことにした。

「あーあ、負けた」

「私もギリギリだったけどな」

「それでも、負けは負けでしょ。あ、ラウラが勝ったんだし、何か一つぐらいだったらお願い聞くよ?」

「なんでもいいのか?まずそんな約束はしてないが」

「いや、僕の出来る範囲だったらいいかなー、なんて思っ」

「そうか、なら????????」

ラウラは僕に抱きつき、

「好きだ」

急に告白をしてきた。  
だけど、

????????????????  
そう言われたら、受け入れるしか無いじゃないか。

## 第九話 専用機（後書き）

相変わらずの急展開&駄文クオリティ。  
あまり成長しない作者をお許し下さい。  
しかも次からかなり時間飛びそうです。  
具体的には中三のモンドグ  
ロッソ辺りまで。

……モンドグロッソって夏開催でしたっけ？あれ？

感想お待ちしてます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5945y/>

---

IS -隊長補佐の憂鬱-

2011年11月27日13時48分発行